

現代日本語における典型的な引用文とその周辺*

金善眞**

〈要旨〉

日本語における〈引用文〉についての先行研究は〈主格補語+引用情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもっている文に集中されていた。しかし、文の構造さえ異なるもの〈引用文〉が持っている引用的性質を共有している文がある。本稿では現代日本語における多様な引用文を包括・体系的に捉えるため、まず同じ情報を伝える〈非引用文〉と〈引用文〉を対照考察し、〈引用文〉がもつ情報伝達的な側面を明らかにした。そして典型的な〈引用文〉がもっている引用的性質について考察した。典型的な〈引用文〉は第三者から得た情報を聞き手に伝える情報提供文であるが、同時に話し手も聞き手と同じく情報を提供される側であることを表す。このような特徴をもとに本稿では〈引用文〉を分析するファクターとして文構造、情報源(第三者、聞き手、話し手)、場の二重性を提案した。もっとも典型的な〈引用文〉は〈主格補語+引用情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもち、特定の第三者が情報源で、場の二重性が明確である。情報源が聞き手または話し手であったり、場の二重性が薄くなっていたり、文構造が典型的な〈引用文〉から離れていればいるほど周辺の引用文になる。

論文分野：文法(統語論)

キーワード：典型的な引用文、周辺の引用文、文構造、情報源、場の二重性

1. はじめに

我々は〈くじらが哺乳類である〉ことを知っている。この情報を誰かに伝えよう。その際、「くじらは哺乳類だ」と言うことができる。また、場合によっては「先生がくじらは哺乳類だと言いました」「くじらは哺乳類だそうです」「くじらは哺乳類なんだって」と言うこともできる。同じ情報を伝えるのに多様な文が現れ得るのである。本稿では前者を〈非引用文〉後者を〈引用文〉と呼ぶ。

先行研究では、本稿で〈引用文〉として扱う文を大枠で〈引用構文(または引用文)〉と〈伝聞を表す文〉に分け、研究の対象としている。主に個々の文構造がもつ特徴および形式の意味についての研究が行われてきた。しかし、このような研究方法では、〈くじらが哺乳類である〉という情報を伝える二つのタイプの文(非引用文と引用文)の使い分けについて説明することができない。本稿は、同じく〈くじらが哺乳類である〉という情報を伝えるのに、いつ・どんな時に「くじらは哺乳類だ」といい、また、いつ・どんな時に「先生がくじらは哺乳類だと言いました」「くじらは哺乳類だそうです」「くじらは哺乳類なんだって」などというのか、という疑問から出発する。

〈引用文〉だけを視野に入れると、〈引用文〉は第三者(話し手と聞き手以外の誰かを指す)からの情

* 이 논문은 2008년도 정부재원(교육인적자원부 학술연구조성사업비)으로 한국학술진흥재단의 지원을 받아 연구되었음(KRF-2008-1-A00322)

** 建国大学、講師、日本語文法論

報を伝える文であると定義することもできよう。先生から〈くじらが哺乳類である〉という情報を得たのであれば「先生がくじらは哺乳類だと言いました」と言うことができる。〈くじらが哺乳類である〉という情報を誰から（またはどこで）得たかということについては言及せず、情報内容が話し手自分自身からのものではないことを表すために「くじらは哺乳類だそうです」「くじらは哺乳類なんだって」のような文が用いられると説明することができるであろう。

しかし、〈くじらが哺乳類である〉という情報はほとんどの人において、第三者から得た情報である。つまり、誰かから聞いた情報であるか、何かの本で読んだ情報のはずである。にもかかわらず、第三者から得た情報であることを表す形式または文構造を使わずに「くじらは哺乳類だ」ということができる。このような言語事実を説明するためには、同じ情報を伝える〈非引用文〉と〈引用文〉の両方を対象とした考察が必要だと思われる。

一方で、先生から〈くじらが哺乳類である〉ことを教わった生徒は、その情報を「先生がくじらは哺乳類だと言いました」「くじらは哺乳類だそうです」「くじらは哺乳類なんだって」などの多様な文を使って伝えることができる。しかし今までの研究では、「先生がくじらは哺乳類だと言いました」のように引用動詞が用いられた文と「くじらは哺乳類だそうです」「くじらは哺乳類なんだって」のように「(スル)ソウダ/ンダッテ」などの形式が文末に用いられている文が、〈引用構文（または引用文）〉と〈伝聞を表す文〉に分けられ、別々に研究された。そのため〈引用構文（または引用文）〉と〈伝聞を表す文〉の関係についてはほとんど扱われていない。情報伝達の側面からみると、〈引用構文（または引用文）〉と〈伝聞を表す文〉には多くの共通点が見られる。今までの研究では別々に扱われていて、その接点または関係について考えにくかった〈引用構文（または引用文）〉と〈伝聞を表す文〉を〈非引用文〉に対立する項として捉えることにより、一つの体系内に位置付けさせることが可能になる。

以下では、まず先行研究を概観したあと、同じ情報を伝える〈非引用文〉と〈引用文〉の使い分けについて考察し、また、現代日本語における典型的な〈引用文〉の特徴と周辺的な〈引用文〉にはどのようなものがあるかについて述べていくことにする。

2. 先行研究

前節で述べたように、同じ情報を伝える〈非引用文〉と〈引用文〉の関係について考察した先行研究は、管見のかぎりないようである。ここでは、本稿で〈引用文〉に分類した文を研究対象としている先行研究について概観する。

先行研究はまず大きく二つに分かれる。〈引用構文（または引用文）〉についての研究と〈伝聞を表す文〉についての研究である。〈引用構文（または引用文）〉に関する主な先行研究は砂川(1987、1998、2003)、藤田(2000)、鎌田(2000)がある。「先生がくじらは哺乳類だと言いました」のように基本的に〈主格補語+引用された情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもつ文を〈典型的な引用構文（または引用文）〉とみていて、同様の構造をもつ文、もしくは引用動詞が用いられた文がその研究対象である。

砂川(1987)は〈主格補語+引用された情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもつ文は場の二重性によって成り立っているといい、場の二重性の違いから〈典型的な引用文/「～と思う」型の文/「～と見

える」型の文」の三つのタイプに分けられると述べている。

典型的な引用文の場合、引用句は元の発言を新たな発言の中に再現したものである。従って、引用句内の命題内容とムードによる構成体はもとの発言者に帰属する。そして、この引用文から引用句を除いた部分はこの文の話し手に帰属する。引用文はもとの文の発言の場と当の引用文の発言の場という二つの場の、前者を後者の中に入れ子型に取り込むという形の二重性によって成り立っている文である。

(砂川(1987)pp.84 - 85)

砂川(1987)で導入された〈場の二重性〉は文の構造と引用という言語行為の仕組みがもつ特徴を連結させた概念である。本稿ではそれを少々方向を変えて受け入れ、本稿でいう〈引用文〉がもつ特徴の一つとして取り入れるが詳しいことは後述する。

藤田(2000)も基本的に〈主格補語+引用された情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもつ文を考察の対象としていて、このような構造をもっている文を「引用句と述語との意味関係」に基づき大きく二つに分けている。

第1類：述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す。

(美恵子は、「今晚は」と言った。)

第2類：述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す。

(誠が「おはよう」と入ってきた。)

(藤田(2000)pp.69 - 76)

藤田(2000)は上に示した第1類と第2類を基本にしてその周辺にある〈引用構文(または引用文)〉を分析するほか、擬声語・擬態語が現れる文との関連性をもとに引用助詞「ト」をどう捉えるべきであるかについて述べている。

鎌田(2000)と砂川(2003)も〈主格補語+引用された情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもつ文が研究対象で、日本語における話法について考察している。鎌田(2000)は話法を〈直接引用/間接引用/準間接引用/準直接引用〉の4段階に分類する。砂川(2003)は話法を場の構成によって〈自由直接話法/自由間接話法/間接話法/直接話法〉そして〈完全引用/要約引用〉に分ける。

次に〈伝聞を表す文〉に関する先行研究であるが、モダリティ研究の流れの中で「スルソウダ」などの形式の機能に注目している研究(寺村(1984)、仁田(1991)、森山(1995)、宮崎他(2002)など)と「ッテ」「トイウ」などの個別の形式の機能に注目した研究がある。

まず、寺村(1984)、仁田(1991)、森山(1995)、宮崎他(2002)などはモダリティ形式の体系の中で伝聞形式をどう位置づけるか、そして、伝聞の意味とは何かということについて焦点を当てた研究である。モダリティ研究における見方の違いから伝聞の定義はそれぞれ異なるが、「スルソウダ」を伝聞の典型的な形式とみている点は共通している。次に個別の形式の機能に焦点を当てた研究がある。文末に現れる「ッテ」に関する研究として山崎(1993、1996)、守時(1994)、三枝(1997)、許(1999)、岩男(2003)、金(2005)などがある。主に文末の「ッテ」がもつ機能についての研究であるが、金(2005)では〈主格補語+引用された情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもつ〈引用文〉との関連性をもとにその機能を分析した。次

に文末の「トイウ」に関する研究として井上(1983)、中畠(1990)、藤田(2002)、金(2007a,2007b)などがある。「トイウ」を一つの形式とみて、「トイウ」がもつ機能や「スルソウダ」との違いについて研究がほとんどであるが、金(2007)は文末に「トイウ」が用いられた文と典型的な〈引用文〉との構造上の共通点に注目した研究である。

先行研究では〈主格補語＋引用された情報＋引用助詞＋引用動詞〉の構造をもつ多様な〈引用文〉の特徴がさまざまな観点から分析されてきた。また、伝聞とはどのような意味を持つのかという側面についてもさまざまな議論が行われた。そして、文末に用いられる引用形式の機能についても大分明らかになっているといえる。しかし、明示的な構文特徴を持っている文と明示的な形式を持っている文だけに研究の焦点が当てられていたため、前節でも述べたような疑問に対する説明はできないという問題がある。

本稿では視点を広げ、〈非引用文〉と〈引用文〉という対立関係から引用された情報を伝える文がどのような特徴を持っているかについて考察する。これは、日本語における〈引用文〉の体系をより広く捉えるための出発点になる。〈引用文〉の体系を考えるにあたっては典型的な〈引用文〉がもっている文構造と場の二重性、そして、情報源と文の機能に注目し、日本語における多様な〈引用文〉を分析していく。

本稿で広く〈引用文〉として研究の対象としている文は、先行研究では「引用」または「伝聞」という用語で説明されてきた。本稿では「引用」は文のレベルでの機能を定義する用語として用い、「伝聞」は「スルソウダ」で代表される第三者からの情報を引用する形式がもつ機能を定義する用語とみる。すなわち、「引用」は文レベルの機能に関わり、「伝聞」は形態論のレベルで形式がもつ機能に関わるということになる。

3. 同じ情報を伝える〈非引用文〉と〈引用文〉の関係

「悲しい」「頭が痛い」「大学に進学したいと思う」「明日は晴れるだろう」のように、話し手自身自身の感情や感覚、希望、推測などを述べる文が伝える情報は話し手のものということができる。しかし、話し手が持っている知識について述べる文の場合、その情報が話し手のものなのか、そうでないのかということは言語形式の側面を越えての議論が生じる。〈くじらが哺乳類である〉という情報を伝える二つの文タイプについて考えてみよう。

A : 「くじらは哺乳類だ」 — 〈非引用文〉

B : 「先生がくじらは哺乳類だと言いました」 — 〈引用文〉

「くじらは哺乳類だそうです」

「くじらは哺乳類なんだって」

〈くじらが哺乳類である〉という情報はほとんどの人にとって習得されたものである。何かの本で読んでいる、または、誰かに聞いた情報であろう。にもかかわらず、Aの〈非引用文〉にはそういった事実

に関わる言語形式が現れていない。それに比べてBの〈引用文〉は〈くじらが哺乳類である〉という情報が何らかの方法で習得されたものであることを表している。

文が伝える情報の性質(当該情報が話し手のものか否か)は、同じ情報を伝える〈非引用文〉と〈引用文〉の使い分けに対して十分な説明を与えてくれない。本稿では視点を変えて、情報のやりとりと話し手と聞き手の立場という観点を導入する。〈非引用文〉と〈引用文〉は共に情報を提供する文である。情報を提供するという行為は情報を提供する側と情報を提供される側があつてこそ成り立つ。情報を提供する文が発せられる際、話し手は普通情報を提供する側で、聞き手は情報を提供される側になる。

話し手	→→→	聞き手
情報を提供する。		情報を提供される。

まさしく「くじらは哺乳類だ」という〈非引用文〉は通常の情報を提供する文である。しかし、「先生がくじらは哺乳類だと言いました」「くじらは哺乳類だそうです」「くじらは哺乳類なんだって」のようなく引用文〉は通常の情報を提供する文とは違う。話し手は情報を提供する側ではない。〈引用文〉に盛り込まれている情報は第三者から得たものであるからである。そのため〈引用文〉の話し手は聞き手と同じく情報を提供される側にある。

第三者	→→→	話し手 / 聞き手
情報を提供する。		情報を提供される。

ある情報を伝える際に〈引用文〉を用いるということは、話し手が聞き手と同じく当該情報を提供された立場にあることを表しているのである。

では、話し手は何をもとに同じ情報を〈非引用文〉として伝えたり〈引用文〉として伝えたりするのであろうか。それは情報のやり取りに関わる立場の違い、そして当該情報の価値と関係している。情報を提供したり、提供されたりという行為は、当該情報に何らかの価値が認められるからこそ行われる。だとすると、情報を提供する側は情報を提供される側より優位に立つ。〈非引用文〉を使って情報を伝えたと話し手が価値のある情報をもっている側として優位性を持っているということを言語外的に表すことになる。それに対して〈引用文〉を使って情報を伝えたと、話し手は自分が聞き手と同じく情報を提供された側にあることを、言語形式または構造で、つまり言語内的に表すことになる。同じ情報を〈非引用文〉を用いて伝えるか〈引用文〉を用いて伝えるかは、話し手が聞き手とどう関わりたいかにより選ばれる。話し手が情報を提供する立場がもつ優位性を捨て、情報を提供される聞き手と同等の立場に立っていることを表すことは、コミュニケーションにおける話し手と聞き手の距離を狭める効果をもたらす。ここまでの考察をもとにとりあえず〈引用文〉は情報を提供しながらも話し手も聞き手と同じく当該情報を提供される側にあることを表す文形式、と考えておく。

以上では、同じ情報を〈非引用文〉としても〈引用文〉としても伝えることができる場合、その使い分けの仕組みについて考察した。ところで、〈非引用文〉を用いることができない場合もある。たとえば、ホテルの職員がお客の伝言を預けた場合、職員はその伝言に盛り込まれている情報を〈非引用文〉

を使って伝えることができない。次節では、〈引用文〉の内部に焦点を当てて、日本語にはどのような〈引用文〉が存在し、さまざまな引用文をどう捉えるかということについて述べていきたい。

4. 引用文分類のためのファクター : 情報源、場の二重性、文の構造

4-1. 情報源

ここでは、日本語の〈引用文〉の体系を考察するためにどのような点に注目すべきであるか、ということについてまず述べておきたい。

前節で〈引用文〉とは情報を提供しながらも話し手も聞き手と同じく当該情報を提供される側にあることを表す文形式であると言ったが、本稿ではこれを典型的な〈引用文〉の特徴と考える。典型的な〈引用文〉において情報の提供者は発話の場に居合わせている話し手と聞き手以外の第三者である。一方で、過去の時点においての話し手の発言または聞き手の発言が引用情報になっている〈引用文〉がある。

- (1)彼は「学校へは行かない」と言いました。
 (2)あなたは「学校へは行かない」と言いましたか。
 (3)私は「学校へは行かない」と言いました。

(1)は第三者から得た情報を引用して、情報を提供する典型的な〈引用文〉である。それに対して(2)と(3)は過去の時点での話し手と聞き手の発話を引用していて、典型的な〈引用文〉とは違う。典型的な〈引用文〉は情報提供文であるが、(2)は情報要求文である。また(3)を情報を提供しながらも話し手も聞き手と同じく当該情報を提供される側にあると説明するには無理がある。

引用された情報が誰からの情報であるかということは当該文の機能と密接に関わっているが、このことは以下のように文末に「(ンダ)ッテ」が用いられた文からより明確に観察できる。

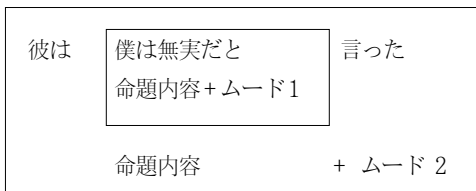
- (4)「南ちゃん、あいつがお姉ちゃんも一緒につて」
 「えっ……？」
 「花火、一緒にやろうと思って持って来たんだつて」 (ロング)
- (5)「いつ出ていらっしたの？」
 「いんです」
 「いまって?」
 「いま東京駅へ着いて、やって来たんです」 (あず)
- (6)「俺……帰るわ」
 「……え？」
 「邪魔でしょ」
 「……そんな」
 「いいつて」そういうと、真二は部屋を出た。 (ロング)

(4)は過去の時点で話し手が第三者から得た情報を提供しながらも、話し手自身も情報を提供される立場にある典型的な〈引用文〉の特徴をもつ。しかし、(5)は(2)と同じように情報要求文の一種で、聞き手の発話内容の一部を問い返す文である。(6)は話し手が直前に言った発話の発話意図を受け入れない聞き手に対して、もう一度繰り返し自分の意思を伝える文である。

このように、〈引用文〉は文の構造が同じでも、また同様の文末形式が用いられていても伝えようとする情報が誰からのものであるかにより、その機能が異なってくる。本稿では、〈引用文〉で伝えようとする情報が誰からのものであるかということ〈情報源〉と呼ぶ。〈情報源〉は第三者、聞き手、話し手に分けられる。

4-2. 場の二重性

場の二重性は砂川(1987)に現れる概念である。砂川(1987)は「彼は僕は無実だと言った」のような〈引用文〉を次のように分析している。



「僕は無実だ」という引用句(引用された情報)に現れる命題内容とムード1は「彼」がそれを「言った」過去の時点における話し手(つまり、「彼」)に帰属し、「彼は僕は無実だと言った」という引用文の命題内容と「言った」という述語に現れるムード2は当該文の話し手に帰属する、と説明している。砂川(1987)でいう場の二重性はこのように〈引用文〉の入れ子型の文構造を説明するための概念である。

本稿では場の二重性を広く〈引用文〉の特徴を表す概念として捉えなおす。引用される情報が〈引用文〉発話の場より先の時点、つまり過去において、すでに存在している情報であれば、〈場の二重性〉が明確であるとみて、〈引用文〉発話の場と引用される情報が発せられた場が非常に近い場合、〈場の二重性〉が薄いと表現する。

- | | | |
|---------------------|------|-------------------|
| (7) 「学校には行かない」 | →→→→ | 「彼は学校には行かないと言った」 |
| 「お姉ちゃんも一緒に」 | →→→→ | 「あいつがお姉ちゃんも一緒につて」 |
| 引用される情報が発せられた場1(過去) | | 〈引用文〉が発せられる場2(現在) |
| (8) 「いんです」 | →→→→ | 「いまって?」 |
| (直前の聞き手の発話) | | |

「俺……帰るわ」 →→→ 「いいって」
 「邪魔でしょ」
 (直前の話し手の発話)

引用される情報が発せられた場1(直前)

〈引用文〉が発せられる場2(現在)

(7)は引用された情報が発せられた場1と〈引用文〉発話の場2が時空間的に離れていて、場の二重性が明確である。(8)は引用された情報が発せられた場1と〈引用文〉発話の場2が非常に接近していて場の二重性が薄い。場の二重性が明確な(7)の例は典型的な〈引用文〉であり、場の二重性が薄い(8)の例は周辺のな〈引用文〉である。このように場の二重性は〈引用文〉の性質に関わる。

4-3. 文の構造

〈引用文〉の構造も〈引用文〉の性質と密接に関わっている。先行研究でも典型的な〈引用文〉としてあげている〈主格補語+引用情報+引用助詞+引用動詞〉の構造を本稿でも典型的な〈引用文〉の構造と考える。

(1) 彼は 「学校へは行かない」 と 言いました。
 主格補語 引用情報 引用助詞 引用動詞

(1)を典型的な〈引用文〉とみる理由は単に文の構造だけをみてのことではない。(1)は第三者が情報源で場の二重性が明確である。例えば次のような文は典型的な引用文ではない。

(9) 「大阪では 店の人が 『おおきに』 と いう」
 主格補語 引用情報 引用助詞 引用動詞

文の構造だけを見ると(1)と(9)はまったく同じである。ところが、(9)は大阪地方での挨拶の言葉を紹介する文であって、第三者からの情報を提供しながらも話し手も聞き手と同じく当該情報を提供される側にあることを表す文ではない。(1)と(9)の違いは、まず、(9)の情報源の性質に現れる。「店の人」は話し手でも聞き手でもないのだから第三者である、ということになるが、情報源が第三者であるといっても、(1)とは違って(9)の情報源は特定の第三者ではない。また、引用動詞が非過去形である。これは場の二重性にかかわる。典型的な〈引用文〉における場の二重性が、明確になるためには引用動詞のテンスが過去を表すことのできる形である必要がある。

(9)' 「大阪では店の人が『おおきに』といった」

(9)'のように引用動詞の形を過去形に変えると、文の伝える意味が(9)とは大分変わってくる。「店の人」は話し手が直接会った誰かで、話し手は「おおきに」という情報を提供された立場に変わるのである。(9)は文の構造だけを見ると(1)と同じであるが、情報源の性質と引用動詞からみられる場の二重性が

(1)とは違っているため、典型的な〈引用文〉とは言えなくなる。

典型的な〈引用文〉の構文構造は、周辺のな〈引用文〉を分析する際に手がかりになる。

(10) 公平は店の中へ突入寸前だった舞子を止めた。

「部長が帰ってこいってき」

(hero)

(10)の「部長が帰ってこいってき」は「部長が帰ってこいって {イッタ/イッテイタ/イッテイル}」のように引用動詞を補うことができる。引用動詞を補えば、文の構造も、そして文の表す意味も典型的な〈引用文〉と同等になる。

(11) 公衆電話ボックスから出てきた遠藤に、冬実が尋ねた。

「宗ちゃん、何だって?」

「祝福してるって」

(オーバー)

(11)の「祝福してるって」は文の中に主格補語が存在しない。が、文脈から「宗ちゃんが」という主格補語を読み取ることができる。この場合も「宗チャンガ 祝福してるって {イッタ/イッテイタ/イッテイル}」のように主格補語と引用動詞を補えば、典型的な〈引用文〉と同等になる。

(12) 「そう。おもしろかった」

「それだけ?」

「それだけって?」

(ひまわり)

(13) すみれ「いいよ、こんなごっついの」

青島「(取って)はい」

すみれ「いいって」

(踊る)

しかし、(12)と(13)は主格補語と引用動詞を補って〈主格補語+引用情報+引用助詞+引用動詞〉の構造を作ることができない。(12)と(13)が表す文の意味も典型的な〈引用文〉とは離れている。

5. 現代日本語における〈引用文〉の体系

4節で〈引用文〉を分析するためのファクターとして情報源、場の二重性、文の構造をあげた。ここでは日本語の引用文を文の構造別にわけ、情報源と場の二重性からそれぞれの〈引用文〉を分析する。

① 〈主格補語+引用情報+引用助詞+引用動詞〉

このタイプの〈引用文〉は引用動詞のテンスからまず二つに分けられる。引用動詞が〈シタ・シテイタ・シテイル〉の形で、引用情報が過去の時点で得られたことを表す文は、場の二重性が明確である。これらの文は過去の時点において、「ガ」に現れる誰かにより、「ト」という内容が、「引用動詞」で表される行為として存在したことを述べる文である。一方で情報源が〈誰か(第三者/聞き手/話し

手) 〉ということにより、意味機能がそれぞれ異なる。主格補語として現れる情報源が第三者である〈引用文〉がもっとも典型的な〈引用文〉である。

(14) 寛治「徹夜したのか」

奈緒「うん、鹿児島の松田さんが早く納品してほしいって言ってたし」

寛治「御苦労だったな」

(結婚)

(14)は第三者情報源が主格補語である。主格補語で表された人物は引用動詞の「言う」という行為を過去の時点において行っており、引用助詞によってその「言う」行為の内容が示された典型的な〈引用文〉である。〈引用文〉の側面からいうと、この文の話し手「奈緒」は第三者からの「早く納品してほしい」という情報を聞き手に伝えながら、話し手自身もその情報を提供された立場にある。

次の文の構造は上の(14)と同一であるが、情報源が第三者ではなく聞き手である。

(15) 山本「俺たち付き合ってる、って言ったよな、この前」

絵里花「……(頷く)」

(砂上)

(15)は過去の時点において、聞き手が話し手に言った内容が引用情報である。よって場の二重性は明確であるが、情報源が第三者ではなく聞き手であることが(14)のような典型的な〈引用文〉とは異なる。典型的な〈引用文〉が情報提供文であるのに対し、聞き手が情報源である(15)は情報要求文の一種である。情報要求文は基本的に話し手は知らない情報を聞き手が持っている場合に用いられる。ところが、(15)は話し手が知らない情報の提供を聞き手に求めるためのものではない。(15)は聞き手の過去においての発話を取り上げながら、それが発話現場での聞き手の行為とはくいちがっていることを指摘している。よって、引用動詞は「ヨナ/ヨネ/ジャナイカ」などの形式と共起するか否定形になっている場合が多い。

(16) 千秋「ひよっとすると、野口さんと私、相性いいかも。付き合ってみないと判らないけどね」

美代子「(ムッと) 合わないと思うよ」

千秋「そお?」

雅子「千秋、男たくさんいるって言ったじゃない、友だちの彼氏にアタックすることないじゃない」

千秋「そんな気ないけどさ(と、美代子を見る)」

美代子「(ちょっとブ然と) ……」

(逢い)

(17) 雅子「大阪東京、何回往復したんだろ。交通費、いくら使ったんだろ」

美代子「(感情が込み上げて) そんなこと言わないでよ」

雅子「え?(と、美代子を見る)」

美代子「楽しそうに大阪に行ってたじゃない」

雅子「……」

美代子「雅子、言ったじゃない、遠距離恋愛も楽しいもんだって。言わなかった!?」

雅子「(美代子の剣幕に驚いて) 言ったけどさ……」

(逢い)

(15)から(17)のように聞き手が情報源である場合、文の構造が整っていて場の二重性が明確であっても当該文は典型的な〈引用文〉とは違う機能をする文になる。

次は話し手が情報源である〈引用文〉の例である。

(18) “副支店長” —— 島田太郎の名刺に刷り込まれた文字。

声「副支店長だと!? 俺は支店長を呼べと言ってるんだ」 (島田)

(18)は典型的な〈引用文〉と文の構造が一致する。また、引用情報は話し手が過去の時点に聞き手に話した内容である。しかし、(18)は引用情報を提供する情報提供文ではない。聞き手が話し手の言った内容とはくいちがう行為を見せている発話現場の状況に対して、抗議・反発するの意を表す文である。また、話し手を情報源とする〈引用文〉は、直前の話し手の発話内容が引用情報になっていて場の二重性が薄い例も多い。話し手を情報源とする〈引用文〉の引用動詞は(18)のように「言ッテイルノダ」の形、または、「ダロウ、ジャナイカ、ノニ」などの形式と共起することが多い。

(19) 美代子「昨日、どうして遅くなったの?」

雄 介「(ムッと) 渋滞だって言っただろ!?」 (逢い)

(20) 雄 介「お友だち作戦?」

有 本「まずお友だちとして楽しく付き合う。で、ひょっとして私って有本さんのこと好きなのかしら……って思わせるように持って行く」

雄 介「そうしろって言ってたじゃない」

有 本「ウン。だからさ、頼むよ」

雄 介「何?」 (逢い)

(21) 雅人「(奈緒の服装に) おめかし、しちゃって」

奈緒「一番地味なのにした」 それは嘘。持っている服の中で、一番派手なワンピースだ。

雅人「眼鏡取った方がいいって言ったのに」

奈緒「コンタクト、持ってないし……」 (結婚)

以上で述べたことをまとめると典型的な〈引用文〉とは、

- ① 〈主格補語+引用情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもち、
- ② 特定の第三者が情報源で、
- ③ 引用動詞の形から場の二重性が明確に現れる文、である。

情報源が聞き手・話し手である場合は、典型的な〈引用文〉とはその機能が異なる。实例を観察してみると、聞き手と話し手が情報源である〈引用文〉は文中に主格補語がほとんど現れない。典型的な〈引用文〉とは違う文の機能が文の構造にも影響を及ぼしているのだろう。

次は引用動詞が非過去の形になっている〈引用文〉である。

(22) 例えば、モノを言い切る詩型はウジウジしてはできないのだ。だが、「ウジウジできない」

から、俳句は元気がいい。当初短歌をやっていたという權さんは「私、俳句始めて性格変わった」という。俳句を始めると、人間が明るくおおらかになるのは、確なようだ。(毎日1)

(22)は引用動詞〈言ウ〉が非過去形の例である。文末に用いられる「トイウ」を「ダロウ」などのように助動詞と分類し、一つの形式として伝聞を表すとみる研究者もいる。实例をみても文末に「トイウ」が用いられた文は、主格補語の文中の存在有無、情報源を表す形式との共起、情報源の特定が可能か否か、引用情報の性質などによって、一つの形式としての文法化が進んでいるものから、(22)のように典型的な〈引用文〉に非常に近いものまで多岐に渡っている。詳しくは金(2007a)を参照されたいが、第三者情報源が主格補語として現れ、場の二重性が認められる(22)のような例は、典型的な〈引用文〉とほぼ同じ引用的な性質をもつとみることができる。ただし、文体に制限があってほとんどの場合書き言葉の中で用いられる。なお、聞き手と話し手が情報源になる例がほぼ見られないという特徴がある。

文末に「トイウノダ」が用いられた文は「トイウ」が用いられた文とは対照的で、話し言葉の中でも用いられる。また、主格補語に第三者だけでなく聞き手と話し手がくることもできる。

- (23) 「私の妹の婚約者が黒人だからといって」と菊栄は泣かんばかりにいった。「あの人はがまんできないうのよ。妹に取り消させるというのよ」(飼育)
- (24) 「いくら……というの？」
「手切れ金よ。いくら出すの？ それを預かって来たんでしょ？」
「いえ、そういうものは、別に……」
「出さないの？ タダでここを出て行って言うの？」(女社)
- (25) 「いま時分、そとへなんか行かなくてもいい、こっちへこい」
「……」
「こっちへきて、おとつあんの前にすわれ。——おい、すわれと言うんだ」(路傍)

(23)は第三者情報源が主格補語で、場の二重性も明確であり、典型的な〈引用文〉と同等な引用的性質を持つ文である。(23)のような文の特徴は、情報の提供に加えて、話し手の評価(引用された第三者の発話内容は適切ではないという評価)をも表していることである。第三者が情報源である「トイウノダ」文のもう一つの重要な特徴は、話し言葉での機能と地の文での機能が異なることである。金(2007b)では、文末に「トイウノダ」が用いられた文を典型的な〈引用文〉との関連性や文の機能、文体、「トイウノダ」の文法化について詳しく論じた。地面に限りがあるので、ここでは話し言葉で第三者を情報源とする例(23)、聞き手を情報源とする例(24)、話し手を情報源とする例(25)だけを示しておく。文末に「トイウ」が用いられた文に比べると「トイウノダ」が用いられた文は②で考察する第三者情報源を表す形式と一緒に用いられる用法はそれほど発達していない。

② 〈第三者情報源+引用情報+引用助詞+引用動詞〉

上でみた文末に「トイウ」が用いられた文の特徴は、文頭に第三者情報源を現す形式がくることである。この場合も典型的な〈引用文〉と引用的な性質はほぼ同等である。

- (26) 角田義治さんによると、狐火は大正、昭和初期まで全国で見られたという。 (毎日2)
- (27) 岐阜県で取材中にきいたところによると、道三の子孫といわれる家が静岡にあるという。 (国盗)
- (28) 自治省の調査によれば、908団体(都道府県47団体、市区町村861団体)が情報公開条例または要綱を制定しているという。 (情報)

第三者情報源を表す形式とは、上の例に見られるように「～ニヨルト、～ニヨレバ、キイタトコロニヨルト、～の話ニヨルト、～ニ言ワセルト」などの形式をいう。これらの形式は基本的に第三者情報源を表しながら文頭に現れる。このような形式が現れる文の文末には「トイウ」以外にも「トイウノダ」「(スル)ソウダ」「トノコトダ」などの形式が用いられる。「(スル)ソウダ」「トノコトダ」などの形式が用いられた例は以下の③でみることにして、ここでは、上の「トイウ」が用いられた例と「トイウノダ」が用いられた例だけを取り上げる。

- (29) 「梯四郎さんに言わせると、太郎が最低で四年間、もしかしたら大学院まで名古屋で過すんなら、部屋借りるより、アパート買って、太郎が東京へ帰る時は、売って来ればいい、と言うのよ。その方が、大して儲かりゃしないだろうけど、気分のいいところにいられるだけトクだって言うの。」 (太郎)

第三者情報源を表す形式が文頭に用いられた文の引用的な性質は典型的な〈引用文〉とほぼ同等である。異なっているのは文構造と引用動詞のテンスだけである。主格補語の代わりに第三者情報源を表す形式が文頭にきて、引用動詞は非過去形をとる。①の構造の〈引用文〉は聞き手と話し手を情報源とすることが可能で、その場合、引用的な性質が変わった。が、このタイプの引用文は文の構造自体が第三者からの情報を引用するものとして文法化しているとみることも可能であろう。しかし、以下でみる〈(第三者情報源) + 引用情報 + (スル)ソウダ等〉に比べてみると、情報源が意味上、動詞「言ウ」の主格補語になることが可能で、文構造が典型的な〈引用文〉に類似している点などから文法化の度合いはそれほど高くないと考えられる。

③ 〈(第三者情報源) + 引用情報 + (スル)ソウダ等〉

「(スル)ソウダ」「トノコトダ」「ト聞ク」などの形式はそれ自体が第三者からの情報を提供するという意味を持っている。よって、第三者情報源を表す形式が用いられなくても当該文は典型的な〈引用文〉同等の引用的性質を持つことができる。一方で第三者情報源を表す形式も、「トイウ」「トイウノダ」「(スル)ソウダ」「トノコトダ」などの形式が無くても、典型的な〈引用文〉同等の引用的性質を持つ文を作ることができる。「(スル)ソウダ」という形式は第三者からの情報を伝えることがその機能である。「トノコトダ」も報告をするというニュアンスを持っているということや過去形(トノコトダッタ)になりうるという特徴はあるが、第三者からの情報を引用する専用形式である。「ト聞ク」も第三者からの情報を引用する専用形式の一つである。構造は「引用助詞 + 引用動詞」であるが、①のような文構造をなすことはできず、形式化された形である。③のタイプの文は、文の構造より、第三者情報源を

表す形式および「(スル)ソウダ」「トノコトダ」「ト聞ク」などの形式自体がもつ意味が、典型的な〈引用文〉同等の引用的性質を表していると言ってもいい。

④ 〈主格補語+引用情報+引用助詞〉

この構造は典型的な〈引用文〉の文構造から引用動詞だけが抜けたものである。

(10) 公平は店の中へ突入寸前だった舞子を止めた。

「部長が帰ってこいってさ」

(hero)

(30) 青島「署長が警務課へ行けと」

警務課長「コピー取りとファックス流しをやってもらおう。それ以外はやるな！」

青島「……よろしくお願いします」

(踊る)

4節でも述べたように、(10)は第三者が情報源であって主格補語として明示されている。また「部長が帰ってこいって {イッタ/イッテイタ/イッテイル}」のように引用動詞を補えば、文の構造も文の表す意味も典型的な〈引用文〉と同等になる。文の構造さえ典型的な〈引用文〉と異なっているものの、典型的な〈引用文〉とみてもいいのではないかと思われる。この構造の〈引用文〉の引用的性質については①の〈主格補語+引用情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもつ〈引用文〉とほぼ同様なことがいえる。というのは、(10)のように第三者が情報源である場合だけでなく、聞き手と話し手が情報源である例においても引用動詞を想定して補うことができる例が多く、その場合、当該文の引用的性質は、①でみた聞き手と話し手が主格補語である文と同等である。このことについての詳細は金(2005)を参照されたい。

⑤ 〈引用情報+引用助詞〉

〈引用情報+引用助詞〉の文構造をもつ〈引用文〉の中で、次のように文脈から第三者情報源を主格補語として想定できる場合は、典型的な〈引用文〉に言い換えることができ、典型的な〈引用文〉相当の〈引用文〉ということができる。

(31) 「利奈ちゃんからです。渡してくれって」

(オーバー)

(32) 「本当によかった? 私越してきて」

「いいよ。オヤジは若い子と逃避行。パリでくらすんだって」

(結婚)

(33) 公衆電話ボックスの前実(ふくれた顔で、中からドアをあけ、ゆっくり出て、乱暴に閉める)

時江の声「国際工業大学の西寺だってばあ、だって。なによ、馴れ馴れしく。出て来ない? お茶ならいいでしょうだって」

(林檎)

(34) 美代子の声「あの時は雪に足を取られて二人して転んでばかりいましたね。最近は全然転ばなくなつたとか。雄介ももうすっかり北海道の人って感じですね。なんだか雄介が遠く感じられ、ちよっぴり淋しいな」

(逢い)

(31)から(34)は文脈から情報源である第三者を読み取ることができる。それを主格補語にして「イッタ

「/イッテイタ/イッテイル」のような引用動詞を補えば、典型的な〈引用文〉になる。これらの文は構文の要素こそ欠けているが、文の引用的な性質は典型的な〈引用文〉同等である。その一方で各形式は、それぞれの特徴をもっている。「ッテ」は引用情報を表す文の文末に制限がなく直接引用が可能であるのに対して、「ンダッテ」は命令形とか終助詞などを許容せず間接引用しかできない。また「ダッテ」には、引用情報の発信者になりかわり、まねをするような感じで伝える機能がある。「トカ」は引用情報を不確かなもの、または、驚きの情報として伝える機能がある。

情報源が聞き手または話し手である場合は、①の文構造にも現れたように聞き手の先行発話に反発・抗議する気持ちを表したり、終助詞化したりと、典型的な〈引用文〉とは異なる性質を持つ文になる。またその場合、場の二重性も薄くなっていく。

(35) 「みんなで一緒に行けばいいじゃないか」

「みんなでですって？」麻沙子の大声で、まわりの客たちの喋り声が一瞬途絶えた。(ドナウ上)

(36) 「大丈夫だ。僕は無事だよ」

「無事だと？」彼は血がこびりついている歯をむいて、あえぎながらいった。(忍ぶ)

(35)、(36)は聞き手の先行発話の一部を繰り返しているので、場の二重性はある程度認められるということができるが、聞き手を主格補語として「アナタハト言ッタカ」のように書き換えると、文の伝えようとする意味が変わってしまう。(35)、(36)は聞き手の先行発話が適切ではないと抗議・反発する気持ちを表す形式として形式化されているからである。この場合「ッテ」と「ト」は単独ではなく「ダッテ? / デスッテ?」「ダト?」のように「ダ/デス」と結合した形で現れる。聞き手の先行発話を繰り返している「ダッテ? / デスッテ?」「ダト?」は引用形式というより、終助詞に近い機能をもっているということができる。

(37) あかり「お父さん好き勝手やってるんだから、お母さんもやればいって。……私は一人で生きてくから」(別れ)

(38) 寛治も仕事を中断して、氷の前で涼をとる。普段は無口な父だが、宗雄が相手だとよく喋る。

寛治「昨日の氷の方がツヤがあったぞ」

宗雄「おんなじだってば(と、一緒になって涼をとり) やっぱり駄目なのかね、冷房をつけちゃうと、ガラスって」

奈緒「微妙に硬さとか、違ってきちゃうから」(結婚)

(37)、(38)も〈引用文〉の性質をほとんど持っていない。引用形式が用いられてはいるが、話し手が聞き手と同じく情報を提供される側にいるとはいえない。場の二重性も薄く、引用の性質が弱い。これらの「ッテ」と「ッテバ」は終助詞「ヨ」に言い換えることもできる。引用の形式が持つ機能から離れ終助詞に近い機能をしているといえる。

⑥ 〈引用情報+カ/ダ/ヨ〉

このタイプの文は今までの研究で注目されることがなかった。典型的な〈引用文〉との接点がなく、

伝聞を表す形式も現れない。しかし、聞き手の先行発話を取り上げ、繰り返しているので明確とはいえませんが場の二重性が認められる。

- (39) 太 郎「お前は同期の出世頭なんだ、優秀なんだ、頑張れ」
田 中「なにが頑張れ、だ」と、酒を煽る。 (島田)
- (40) 電話が鳴る。美代子「(出て、不機嫌に) もしもし」
電話の声「あ、俺……」
美代子「何が俺よ! どういうこと!？」 (逢い)
- (41) 雅 子「銀座で働いているんな人見たんだけどさ、原田さん以上の人っていないんだよね」
美代子「(呆れて) 原田さんに怒ってたんじゃないの？」
雅 子「あ、そうか。でも、愛情ないと殴れないよね」と、ニコニコ。
美代子のM「雄介以上の人、か……」 (逢い)

(39)、(40)、(41)のような文では、聞き手の先行発話の一部を繰り返し言っているので場の二重性をみとめることができる。場の二重性は〈引用文〉がもつ重要な特徴である。しかし、場の二重性以外には典型的な〈引用文〉がもつ引用的な性質を持っていない。これらの文は〈引用文〉と違って、情報を提供する文ではない。聞き手の先行発話の一部を繰り返してはいるが、問い返しでもない。(39)、(40)は「ナニガ」と共起しながら、聞き手の先行発話に対して、適切ではないという抗議・反発の意を表す。(41)は独り言で、情報提供文ではない。聞き手の先行発話を反芻することを表す文である。このタイプの文がもっとも周辺的な〈引用文〉になるだろう。

6. おわりに

本稿ではまず日本語の〈引用文〉がもつ情報伝達的な側面を同じ情報を伝える〈非引用文〉と対照する方法で考察した。その結果、次のようなことが分かった。〈引用文〉は基本的に情報を提供する文であるが、当該情報は話し手が第三者から提供されたものである。一般的な情報提供文の場合話し手が情報を提供し、聞き手が情報を提供されるが、〈引用文〉の話し手は聞き手と同じく情報を提供された立場になるのである。同じ情報を伝える際に、〈非引用文〉ではなく〈引用文〉を使うのは、情報提供者としての優位性を捨て、聞き手と同等の立場にあることを表し、聞き手との距離を狭めるコミュニケーション上の効果を期待するからである。これがさまざまなタイプの〈引用文〉に共通する基本的な特徴である。

次に、日本語におけるさまざまな〈引用文〉の引用的性質を分析するためのファクターとして文の構造、情報源、場の二重性を提示した。典型的な〈引用文〉は〈主格補語+引用情報+引用助詞+引用動詞〉の構造をもち、特定の第三者が情報源で、引用動詞の形から場の二重性が明確に現れる。そして、周辺的な〈引用文〉ではこの三つの特徴の性格が変わる。現代日本語の〈引用文〉を文の構造をもとに分類すると次のようである。

- ① 〈主格補語+引用情報+引用助詞+引用動詞〉
- ② 〈第三者情報源+引用情報+引用助詞+引用動詞〉
- ③ 〈(第三者情報源)+引用情報+(スル)ソウダ等〉
- ④ 〈主格補語+引用情報+引用助詞〉
- ⑤ 〈引用情報+引用助詞〉
- ⑥ 〈引用情報+カ/ダ/ヨ〉

それぞれのタイプの〈引用文〉の内部には、典型的な〈引用文〉に近いものから引用的な性質を失い別の機能へと移行しているものまで存在するが、その引用的な性質は情報源と場の二重性により観察できる。⑥のタイプは薄い場の二重性が認められるだけではあるが、場の二重性は〈引用文〉だけが持っている重要な特徴であるので、〈引用文〉の一種とみた。

以上の考察で〈引用文〉の情報伝達の側面での特徴と現代日本語の典型的な〈引用文〉とその周辺に存在する〈引用文〉を体系的かつ包括的に捉えることができた。本稿での研究方法と成果は日本語の〈引用文〉だけに適応されるものではないと思われる。今後、韓国語の〈引用文〉についても研究を広げたいと思う。

【用例出典】

(ロング) 北川悦吏子『ロングバージョン』角川文庫、(あす) 井上靖『あすなる物語』CD-ROM版新潮文庫の100冊、(hero)脚本: 福田靖ほか、ノベライズ: 白崎博史『HERO』フジテレビ出版、(オーバー) 北川悦吏子『オーバー・タイム』角川文庫、(ひまわり) 藤原伊織『ひまわりの祝祭』講談社文庫、(踊る) 君塚良一「踊る大捜査線」『ドラマ』No223映人社、(結婚) 野沢尚『結婚前夜』読売新聞社、(砂上) 伴一彦『砂の上の恋人たち』「<http://www.plala.or.jp/ban/>」、(逢い) 伴一彦『逢いたい時にあなたははいない』「<http://www.plala.or.jp/ban/>」、(島田) 伴一彦『島田太郎氏の災難』「<http://www.plala.or.jp/ban/>」、(毎日1) [らんだむ批評] 俳句と人間性『毎日新聞』1997年8月1日、(飼育) 大江健三郎『飼育』CD-ROM版新潮文庫の100冊、(女社) 赤川次郎『女社長に乾杯・上』CD-ROM版新潮文庫の100冊、(路傍) 山本有三『路傍の石』CD-ROM版新潮文庫の100冊、(毎日2) [異界ゆらゆら心めぐり] 狐火ついたら消えて、今や町おこし(日曜くらぶ)『毎日新聞』1997年6月1日、(国盗) 司馬遼太郎『国盗り物語』CD-ROM版新潮文庫の100冊、(情報) 奥津茂樹「情報公開は日本を変えるか」『これからどうなる21』予測・主張・夢一CD-ROM版(岩波書店)、(太郎) 曾野綾子『太郎物語』CD-ROM版新潮文庫の100冊、(オーバー) 北川悦吏子『オーバー・タイム』角川文庫、(林檎) 山田太一『ふぞろいの林檎たち』大和書房、(ドナウ) 宮本輝『ドナウの旅人・上』新潮文庫、(忍ぶ) 三浦哲郎『忍ぶ川』CD-ROM版新潮文庫の100冊、(別れ) 「別れさせ屋」『ドラマ』2001年1月No. 259映人社、

【参考文献】

井上和子(1983)「日本語の伝聞表現とその談話機能」『言語』12-1、大修館書店、pp.113-121

- 岩男考哲(2003)「引用文の性質から見た発話「～ッテ。」について」『日本語文法』3巻2号、日本語文法学会編、くろしお出版
- 鎌田 修(2000)『日本語の引用』ひつじ書房
- 許 夏玲(1999)「文末の「って」の意味と談話機能」『日本語教育』101、pp.81-90
- 金 善眞(2005)「「ッテ」文の引用的性質と機能」『日本語文法』5巻1号、日本語文法学会編、くろしお出版、pp.70-88
- _____ (2007a)「文末の「トイウ」の機能と文法化について」『日語日文学研究』60-1、韓国日語日文学会、pp.15-32
- _____ (2007b)「「というのだ」の意味・機能と文法化」『日語日文学研究』63-1、韓国日語日文学会、pp.71-90
- 砂川有里子(1987)「引用文の構造と機能—引用文の3つの類型について—」『文藝言語研究』言語篇13、筑波大学(文藝・言語系)、pp.73-91
- _____ (1988)「引用文における場の二重性について」『日本語学』7巻9号、pp.14-29
- _____ (2003)「話法における主観表現」『朝倉日本語講座』5、北原保雄編、朝倉書店、pp.128-156
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版 pp.255-260
- 中嶋孝幸(1990)「「という」の機能について」『阪大日本語研究』2、大阪大学文学部日本語学科、pp.43-55
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房、pp.67-68
- 三枝令子(1997)「「って」の体系」『言語文化』34、一橋大学、pp.45-57
- 宮崎和人他(2002)『モダリティ』くろしお出版、pp.160-164
- 守時なぎさ(1994)「話し言葉における文末表現「ッテ」について」『筑波応用言語学研究』1、pp.87-99
- 森山卓郎(1995)「「伝聞」考」『京都教育大学国文学会誌』26、pp.25-36
- 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院
- _____ (2002)「引用形式の複合辞化—ムード助動詞的形式への転化の場合—」『日本近代語研究』3、近代語研究会、ひつじ書房、pp.113-139
- 山崎 誠(1993)「引用の助詞「と」の用法を再整理する」『研究報告集』国立国語研究所14、pp.27-50
- _____ (1996)「引用・伝聞の「って」の用法」『研究報告集』国立国語研究所14、pp.1-22

〈 요 지 〉

현대 일본어의 전형적인 인용문과 그 주변

일본어의 인용문에 대한 선행연구는 〈주격보어+인용정보+인용조사+인용동사〉의 구조를 가진 문장에 집중되어 왔다. 그러나 문장의 구조는 다르지만 인용문이 가지고 있는 인용적 성격을 공유하는 문이 있다. 본 연구는 현대 일본어에 분포하는 다양한 인용문을 포괄적, 체계적으로 연구하기 위해 같은 정보를 전달하는 〈비인용문〉과 〈인용문〉의 대조를 통하여 인용문이 가지는 정보전달적인 측면을 밝히고, 전형적인 인용문이 가지는 인용적 성격을 고찰하였다. 전형적인 인용문은 제삼자로부터 얻은 정보를 청자에게 전달하는 정보제공문이지만 동시에 화자도 청자와 마찬가지로 해당 정보를 제공받는 측에 서있음을 나타내는 문장 형태이다. 이러한 인용문의 특징을 기반으로 하여 본 논문에서는 일본어의 인용문을 분석하기 위해 세 가지 요소, 즉 문의 구조, 정보원(제삼자, 청자, 화자), 장의 이중성을 제안하였다. 가장 전형적인 인용문은 〈주격보어+인용정보+인용조사+인용동사〉의 구조를 가지고 특징이 가능한 제3자가 정보원이며 장의 이중성이 명확하다. 정보원이 청자이거나 화자이고 장의 이중성이 떨어져 있으며 문의 구조가 전형적인 인용문의 구조에서 벗어날수록 주변적인 인용문이 된다.

논문분야 : 문법(동어론)

키 워 드 : 전형적인 인용문, 주변적인 인용문, 문장의 구조, 정보원, 장의 이중성

■ 김선진 (金善眞)

건국대학교 강사

ksjokayama@hanmail.net

- 投稿日 : 2010년 11월 30일
- 審査開始 : 2010년 12월 29일
- 審査完了 : 2011년 2월 10일
- 掲載確定 : 2011년 3월 4일